

Whole Person Careのために 明日からできること

第1回Whole Person Care研究会
2020.08.01

土屋 静馬

・昭和大学医学教育推進室
内科(腫瘍・緩和ケア)

McGill University
Center for Medical Education
MA in Healthcare professions
Education



Whole Person Careのために明日からできること

死を考える

私が、あなたが、

“いつかある日、この世から存在しなくなる者”
であることの意味

生きるということ・死ぬということ

“先生、いつまでも一生懸命でやさしい先生でいてくださいね。”

“一生懸命でやさしい先生って言われても、もしかしたら困るでしょうけれども・・・でもね、患者が生きるためにはやさしい先生が必要なんですよ。”



緩和ケアの定義

緩和ケアとは、生命を脅かす疾患による問題に直面している患者とその家族に対して、痛みやその他の**身体的問題**、**心理社会的問題**、**スピリチュアルな問題**を早期に発見し、的確なアセスメントと対処（治療・処置）を行うことによって、苦しみを予防し、和らげることで、クオリティー・オブ・ライフ（QOL:生活の質）を改善するアプローチである。

WHO 2002

現代ホスピス運動



シシリー・ソンドース女史（近代ホスピスの母）

マギル大学 バルフォア・マウント教授

“The Father of Palliative Care in North America”



1975年 マギル大学の大学病院のなかに積極的な治療が困難となったがんや慢性疾患に苦しむ患者のケアのための専門病棟を設置

“緩和ケア病棟”と名付けた

カナダ モントリオール



マギル大学の風景



マギル大学の緩和ケア (Palliative Care) の歴史

- ・“緩和ケア (Palliative Care)”という言葉は、バルフォア・マウント教授が最初に提唱
- ・終末期医療 (ターミナルケア、ホスピスケア) におけるすべてのケアは、学術的に探究され、実践されなければならない (質の保証)
- ・1975年に世界最初の“緩和ケア病棟”がマギル大学のロイヤル・ビクトリア病院内に設立



国際緩和ケア学会（モントリオール）



バルフォア・マウント教授

“The Father of Palliative Care in North America”



マギル大学病院 緩和ケア病棟



Whole Person Careとは？

Whole person care: Beyond psychosocial and physical needs

Balfour Mount, MD

It is now a quarter of a century since Dame Cicely Saunders carefully and thoughtfully laid the foundation of palliative medicine and hospice care. She started the first center for the care of the dying to place equal priority on patient care, research, and teaching. For this, both St. Christopher's Hospice and Cicely deserve a footnote in medical history. She introduced the concept of total pain as a model for understanding chronic pain in the cancer patient, and in so doing, went on to draw attention to the diverse variables that influence the pain threshold.

The patient who is restless, upset, anxious, fearful, angry, or depressed

would be unable to attend a family wedding, his pain returned. We are whole persons. Our experience of pain is modulated by variables arising in each domain of human experience.

When I visited St. Christopher's in September, 1973, Dame Cicely Saunders was advocating whole person care in the tradition of William Osler and the Swiss physician Paul Tournier. In the ensuing years she certainly has not been alone. Those developing and directing primary health care teaching programs and oncology services are increasingly recognizing the need to redress the balance in medical care. There have been a number of primary

careful observer of the human scene and an excellent writer, demonstrates a marvelous clarity in his perception of how we interact with disease and what modifies that interaction. He brought us, *Awakenings*, *The Man Who Mistook His Wife for His Hat*, and *A Leg To Stand On*. In a paper that we should all read, Wasserstein² summarizes what is special about Sacks' observations.

All of these individuals advocate *whole person care*, a "milk and motherhood" issue, the kind of concept that we give verbal support to, but what does it mean? How does it influence our perception, understanding, and acknowledgment of the needs of the patient?

マギル大学の医学教育の歴史

- 1940's "Health and Social Medicine"
- 1969 "Behavior, Growth and Development"
- 1989 "Introduction to the Patient" (ITP)
"Introduction to the Practice of Medicine" (ITPM)
→ Small group teaching format
- 1994 Modified ITP and ITPM

Center for Medical Education (医学教育センター)

▪ McGill Working Group on
"Professionalism"
(Drs. Cruess & Cruess)



▪ McGill Working Group on
"Healing and Health Care"
(Dr. Mount and Dr. Kearney)

2005 "Physicianship Program"
(医療者の二つの役割: "Professional" and "Healer")

2013 MDCM curriculum (RCPSC, CanMEDS framework 2015)

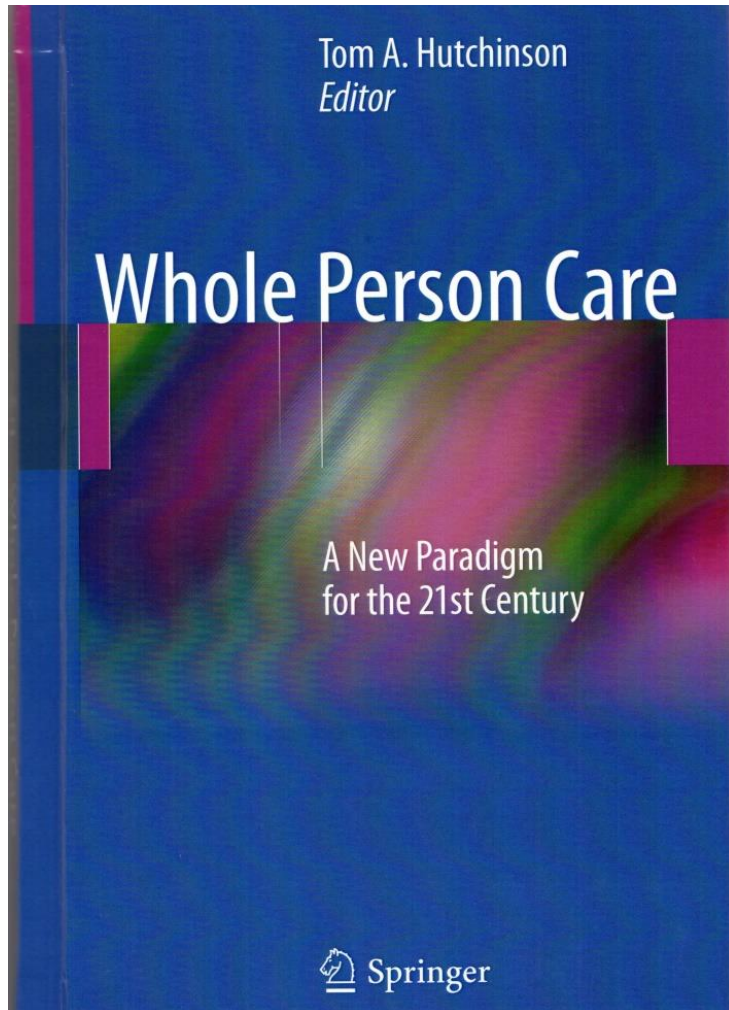
トーマス・ハッチンソン教授



- バルフォア・マウント教授に師事
- 腎臓内科医
- 緩和ケア医
- 現在、Whole Person Care Program Director



“Whole Person Care”を刊行



・Whole Person Care Program のメンバーを中心に2011年に刊行

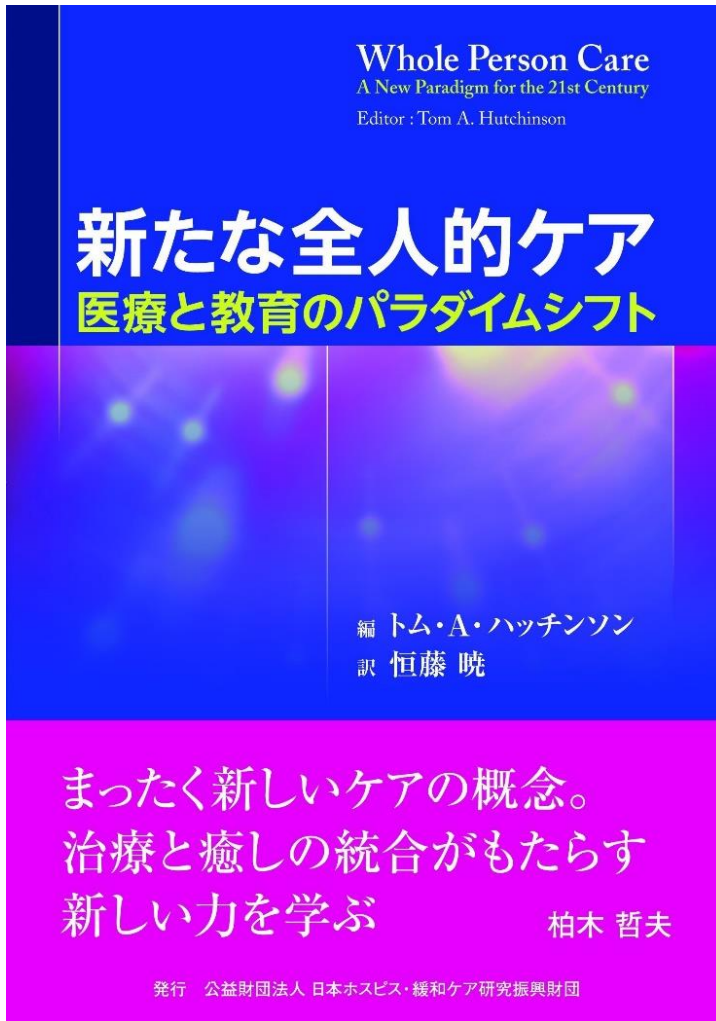
・副題として:

A New Paradigm

for the 21st Century

(21世紀への新しいパラダイム)

Whole Person Care テキスト



・“Whole Person Care”
の日本語訳版

・『新たな全人的ケア』

副題:

医療と教育のパラダイムシフト

トム・ハッチンソン編、恒藤暁訳
発刊:ホスピス財団

Whole Person Careとは？

(新たな全人的ケア)

“発刊にあたって”(vi) 柏木哲夫先生

“翻訳に際して、Whole Person Careの言葉をいかに訳すかが課題となりました。これまで全人的医療や全人的ケアという言葉が広く使用されてきました。それとは異なる概念であるので、別の言葉として全人統合的ケアなどと訳すことも考えましたが、最終的には恒藤先生と相談して“新たな全人的ケア”を書名とすることにしました。したがって、本文で全人的ケアという言葉はWhole Person Careの訳語となります。”

はじめに(iv)

『新たな全人的ケア』 医療と教育のパラダイムシフト
トム・ハッチンソン編、恒藤暁訳 発刊：ホスピス財団

ハッチンソン先生からの問いかけ

「Whole Person Care」とは？

苦悩から患者を開放することが医療の根本的な目標であるとするれば、次の3つの方法があるだろう。

- 1) 苦悩の原因となる問題を解決すること
- 2) より視点を広げ、患者を全人として捉えること
(患者の背景、生活歴、価値観等)

“Cure”の視点

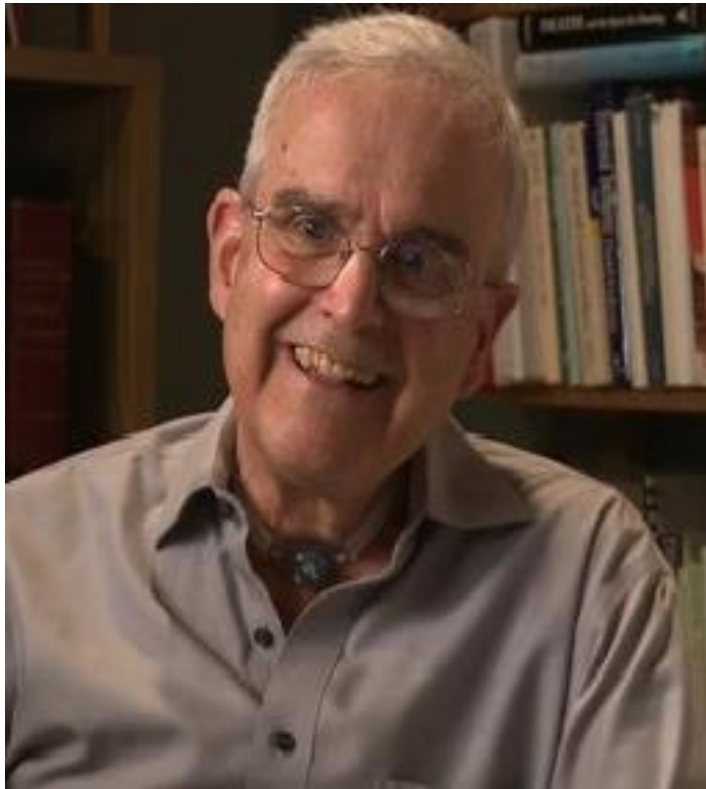
- 3) 問題を解決したり、理解しようとしたり、何かを行おうとしたりすることを第一の目的とはせず
“Healer”として、患者とともに“いま・ここ”にいること

“healer”の視点

Whole Person Careにおける“Healer”とは？

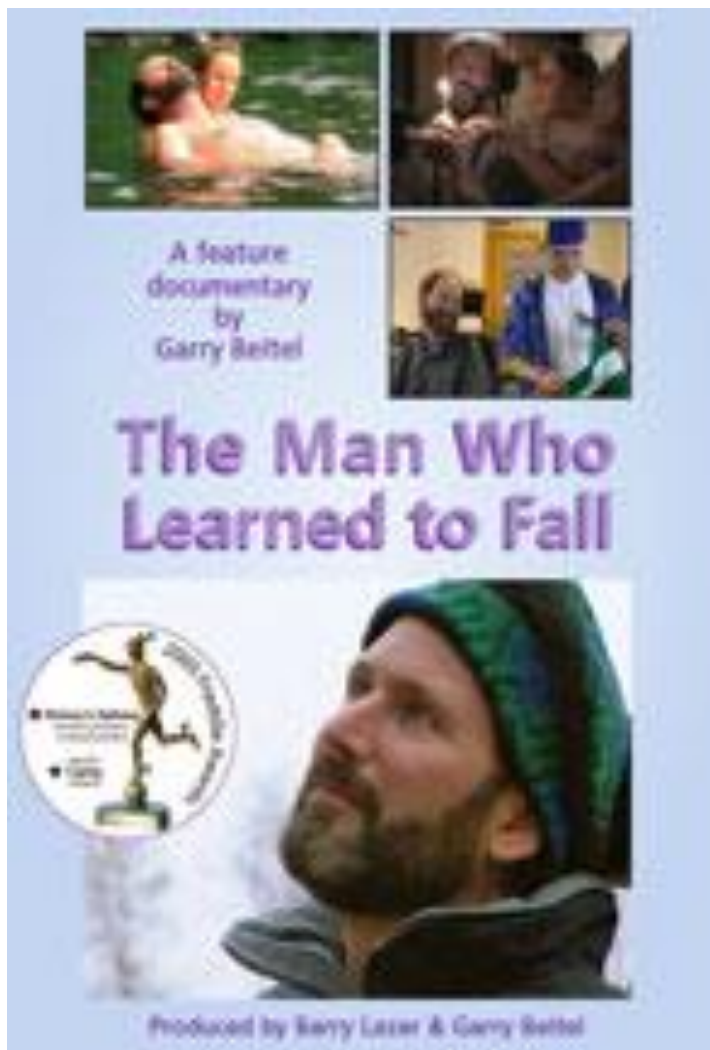
患者の“healing”の過程を支える医療者のこと

マウント先生が語る“ Healing ”の具体例



- ・ 40代の乳がんの患者、胸椎転移
- ・ 圧迫骨折のため入院後に下肢麻痺
- ・ 受傷後、周囲への興味を失い、話しを一切しない
- ・ マウント先生は、担当医ではないが状況は知っていた
- ・ ある時、彼女のベッドから、カーテン越しにハミングが聞こえた
- ・ そのため、彼女に初めて声をかけた
- ・ その後、音楽の話しをきっかけに、彼女は“**いまの彼女**”を語り始めた

マウント先生が語る“Healing”



- ・ 40代の男性、ALSの患者
- ・ ある朝、マウント教授の家に1冊の本が届いた。見知らぬ男性からだった
- ・ 背表紙には「不完全な人生からの贈りもの」(by Phil)とあった
- ・ 本と一緒に、Philのハーバード大学での講演会のチケットが入っていた
- ・ 講演で、彼は進行する病気のなかで、執着を受け流し、どのように“いまを生きる”のかを語り始めた

ハッチンソン先生が語る“ Healing ”の具体例



- ・ アルコール依存症の父
- ・ 薬物療法、意志力を高める、助言をもらうなど通常の見方は効果がなかった。問題は深刻だった。
- ・ ある日、アルコール依存症の集会に出席
- ・ そこで、出会った人々は父自身が自分に抱きたいと願っていた自尊心を持っている人たちであった。
- ・ そこではじめて、父は“いまの自分”の生の在り方について見つめ始めた。

テキスト、P34

ハッチンソン教授が語る“ Healing ”

苦悩は人生の一部であり避けることが出来ない

・アルコール依存症の父：

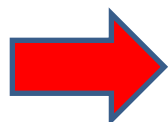
「(酒を飲まずに)人生と向き合う苦しみ」から逃れるため

「アルコールを飲み、現実から逃避しながら苦悩する」

・終末期の患者：

「病気が治らないことを認めることは、自分の人生はコントロール
できるという幻想を失うこと」、ここから逃れるため、

「内心では病気が治らないことを認めながら、病気を克服しようと、
ひどく、苦しみ葛藤する」のではないか。



しかし、最終的に“いま・ここ”の「私」をみつめ、
新しい「私」の存在と意味を見いだす人達がいる

“Healing”とは？

問題を解決したり、理解しようとしたり、何かを行おうとしたりするのではなく、

“いま・ここ”にいる「私」の不確実性に向き合う



新たな苦悩を伴うが、このことが新しい扉を開く



人生の意味の統合や、全体性が見えてくる体験
(人生の質の転換)を生む

“Healing”の定義

Healing:

Definition: a relational process involving movement towards an experience of **integrity** and **wholeness**, which may be facilitated by a caregiver's interventions but is dependent on an innate potential within the patient.

(Mount & Kearney 2000)

Healing:

(病気の経験などを通して)人生の意味の統合やその全体性が見えてくる体験を含む相対的な過程

ハッチンソン先生からの問いかけ

「Whole Person Care」とは？

苦悩から患者を開放することが医療の根本的な目標であるとするれば、次の3つの方法があるだろう。

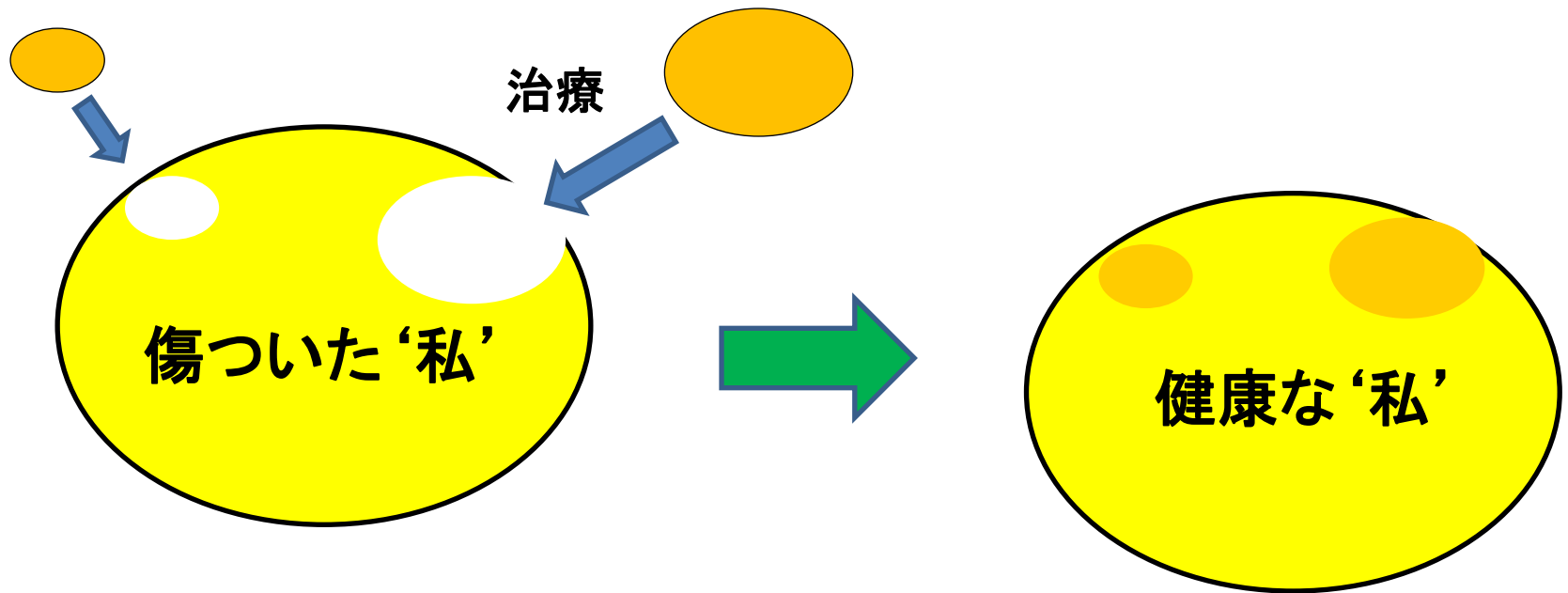
- 1) 苦悩の原因となる問題を解決すること
- 2) より視点を広げ、患者を全人として捉えること
(患者の背景、生活歴、価値観等)

“Cure”の視点

- 3) 問題を解決したり、理解しようとしたり、何かを行おうとしたりすることを第一の目的とはせず
“Healer”として、患者とともに“いま・ここ”にいること

“healer”の視点

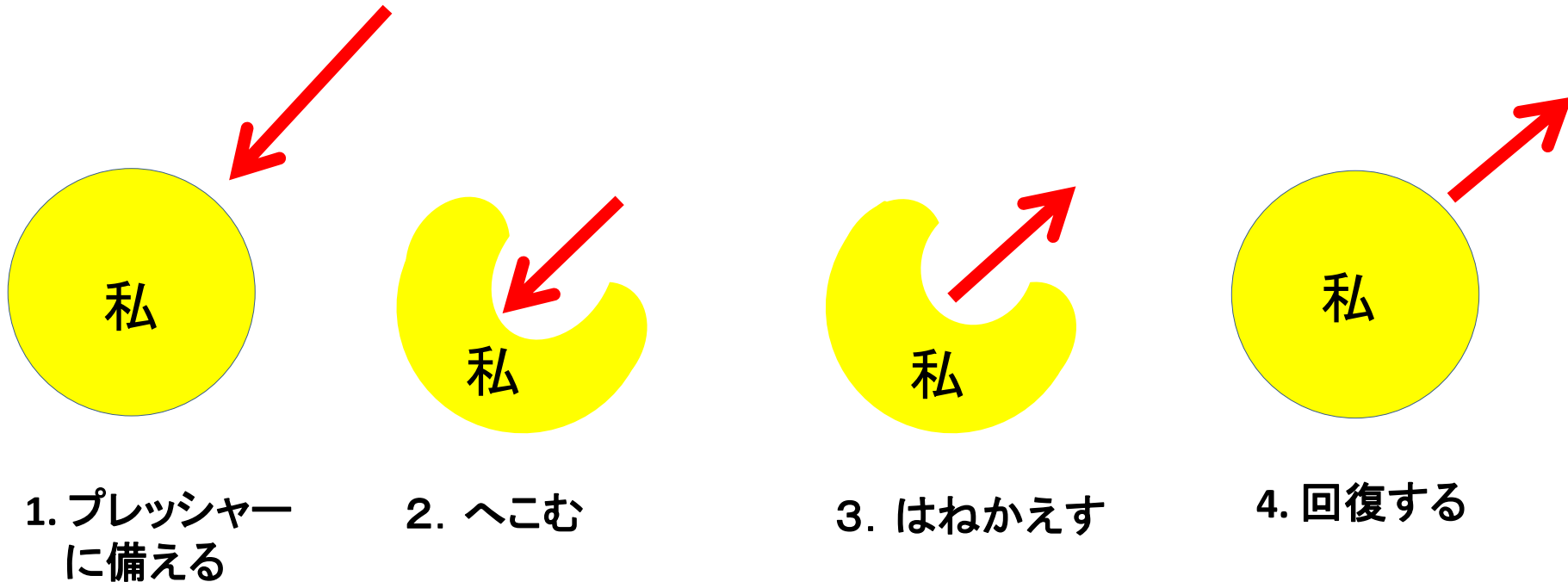
“Cure”の視点で考える「健康への回復」



(ゲルベン,2000)から着想

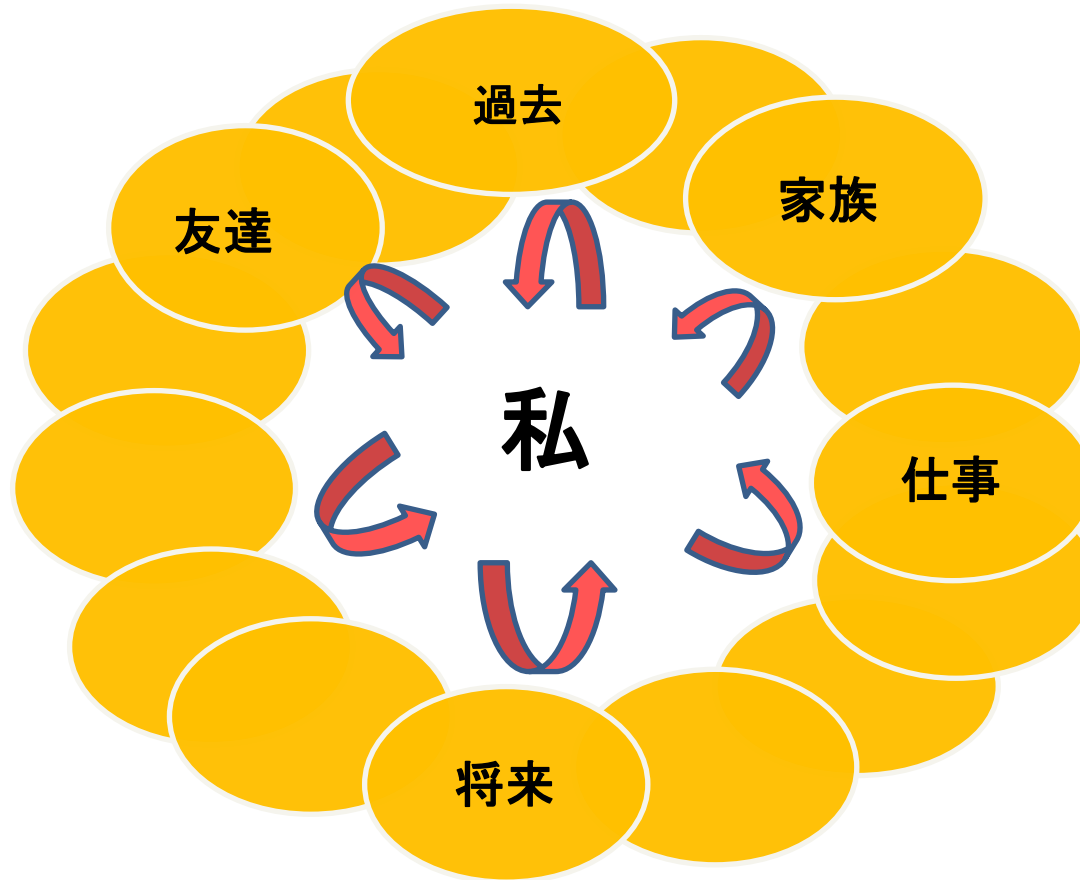
“Cure”の視点で考える「健康への回復」

外部からのプレッシャー

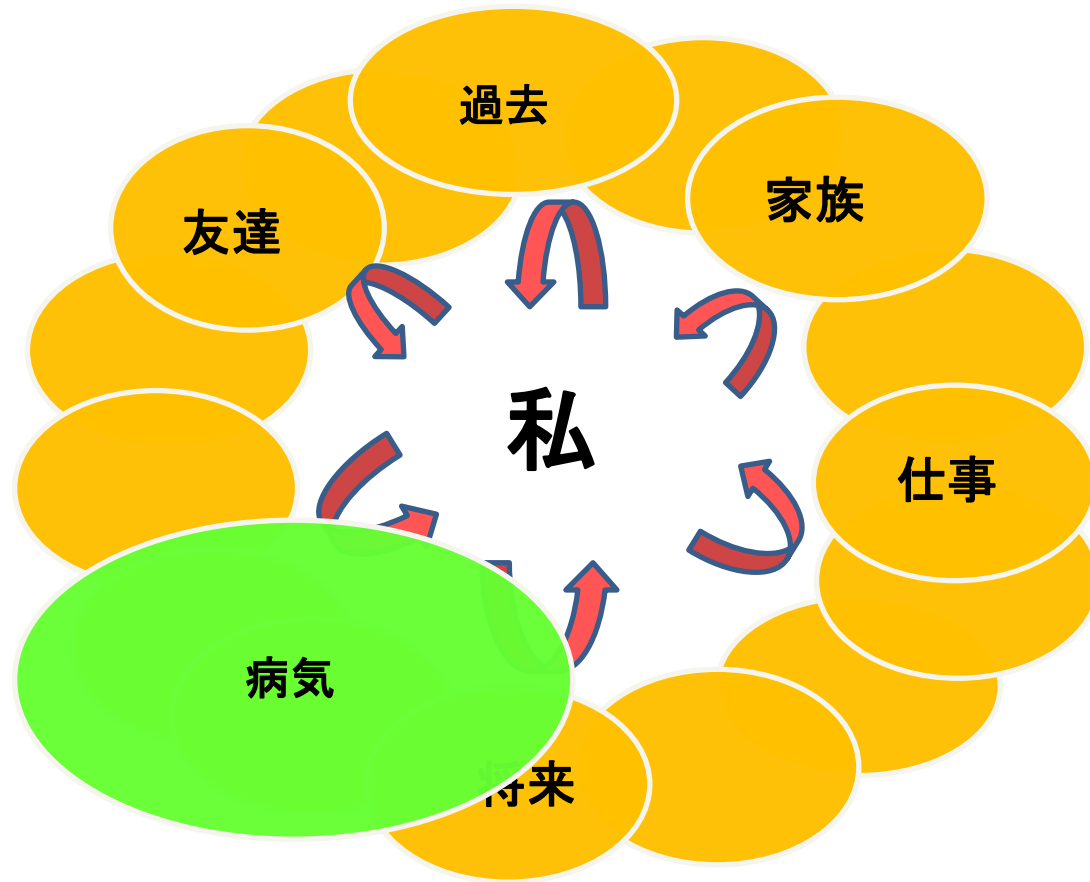


(ゲルベン,2000)から着想

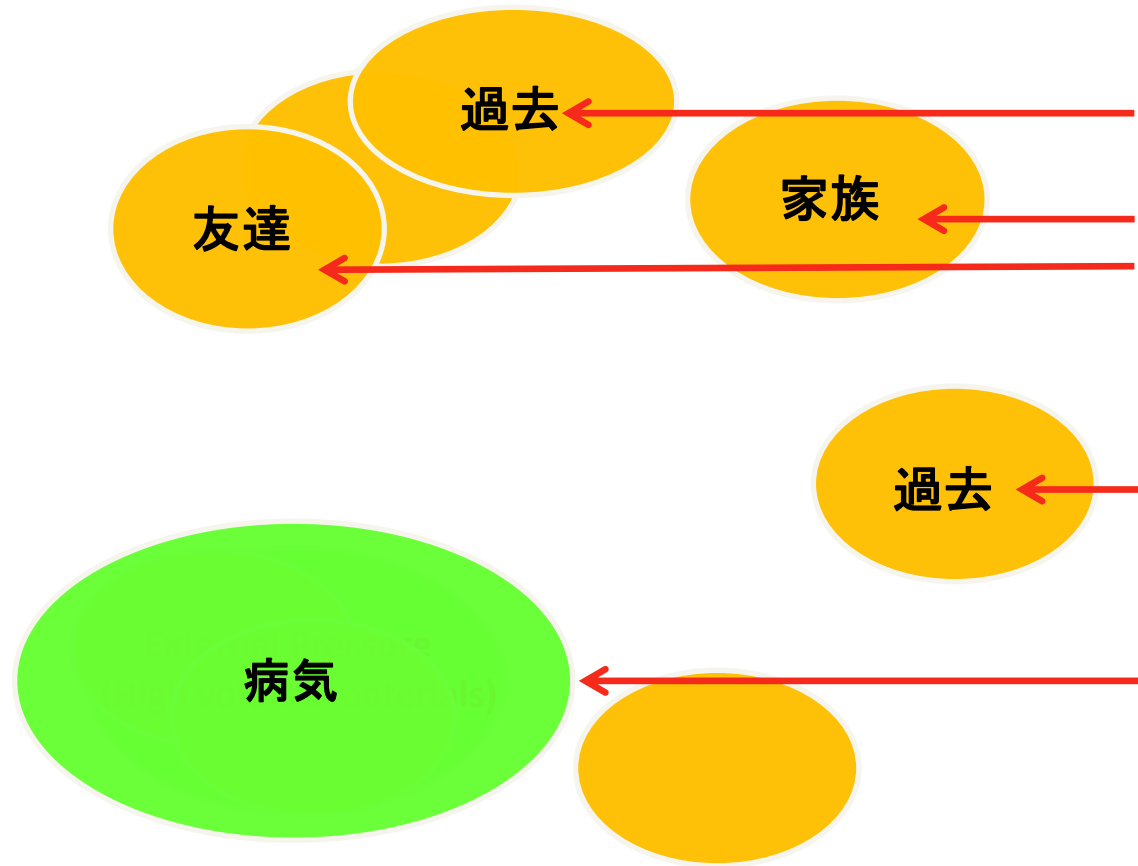
“healing”の視点で考える‘私’



“healing”の視点で考える‘私’



“healing”の視点で考える‘私’

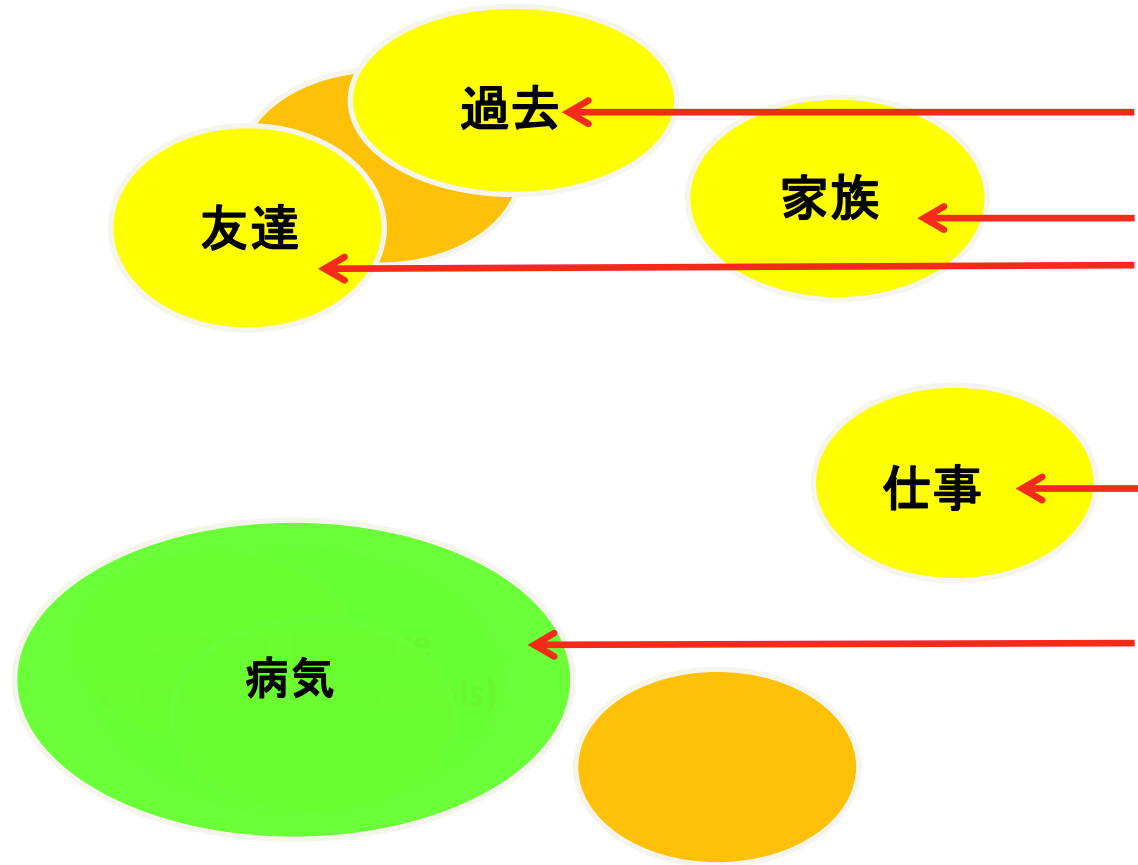


配慮・傾聴

Attention regulation:

- **Attentively**
- **Sensitively**
- **Non-judgmentally**

“healing”の視点で考える‘私’

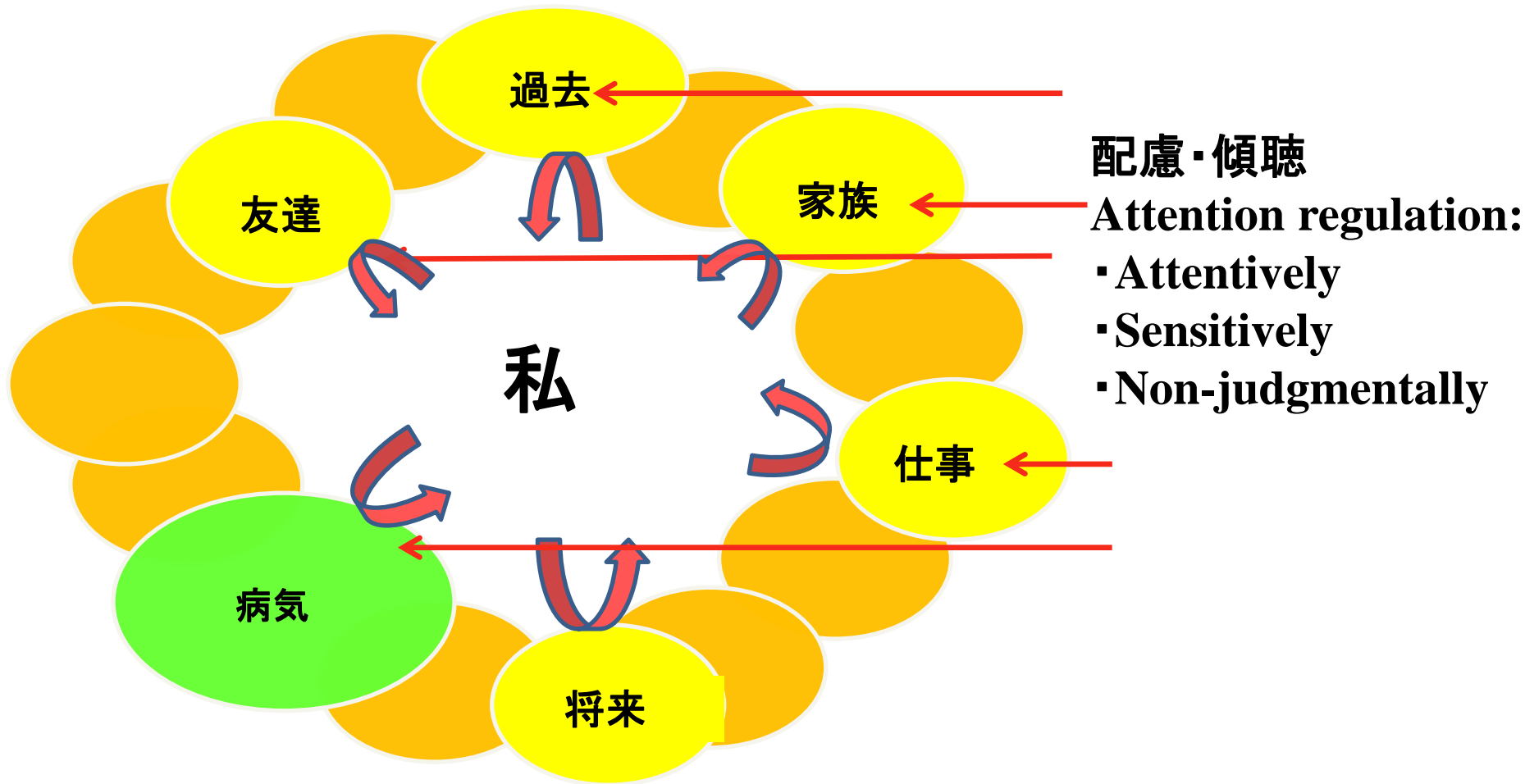


配慮・傾聴

Attention regulation:

- Attentively
- Sensitively
- Non-judgmentally

“healing”の視点で考える「私の意味の回復」




Wounded healer (傷ついた癒し人)

(ギリシャ神話に登場する
半人半馬の賢者・ケイローンの図)

“傷ついた癒し人”は、
『傷ついた人』と『癒し人』の
両者の構成要素が一体と
なって構成される

Wounded Healer (傷ついた癒し人)の役割

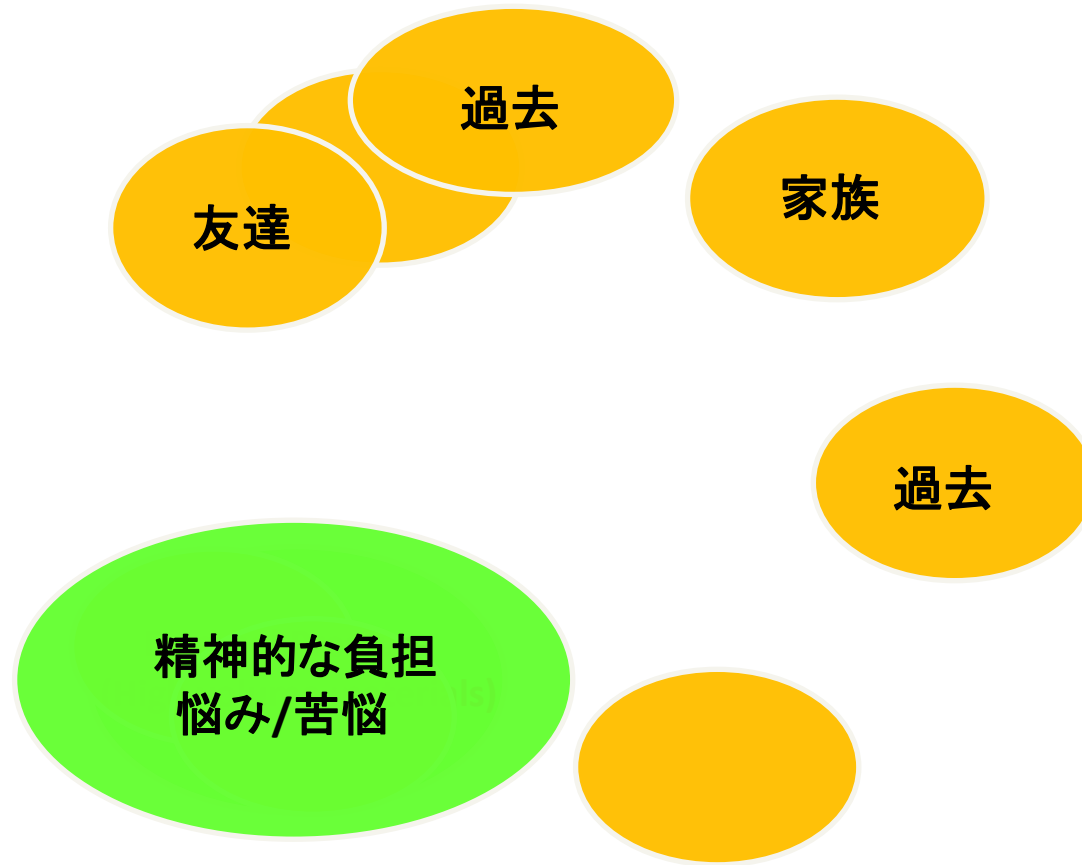
- ・ Wounded Healerは病を治す薬の知識がなければいけない。
- ・ しかし、それと同時に人々の痛みがわかり、そして同じように、生きる意味を求める存在であることに気付いてなければならない。

 患者の問題を解決できる・できないにかかわらず、
“共にいる”人として患者の癒しの過程に関わることになる
(共感的に) (Healing)

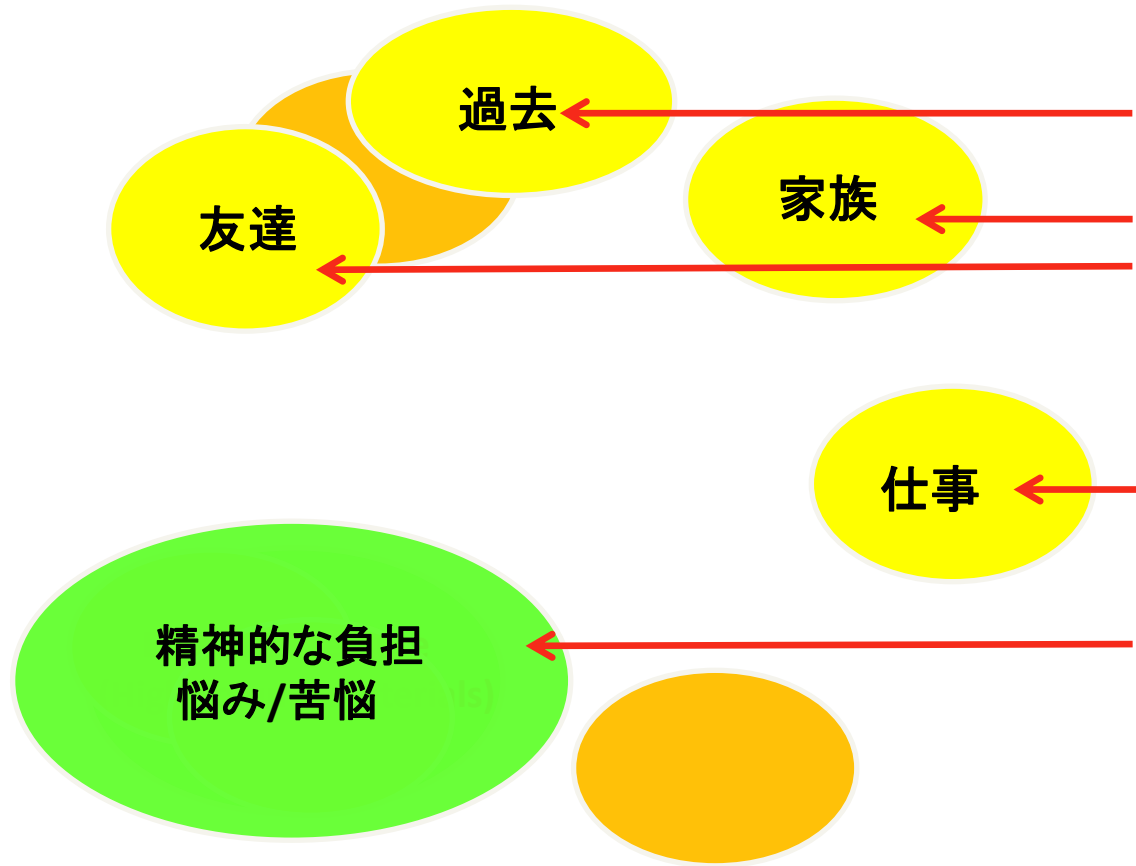
“healing”の視点で考える‘私’



“healing”の視点で考える‘私’



“healing”の視点で考える‘私’



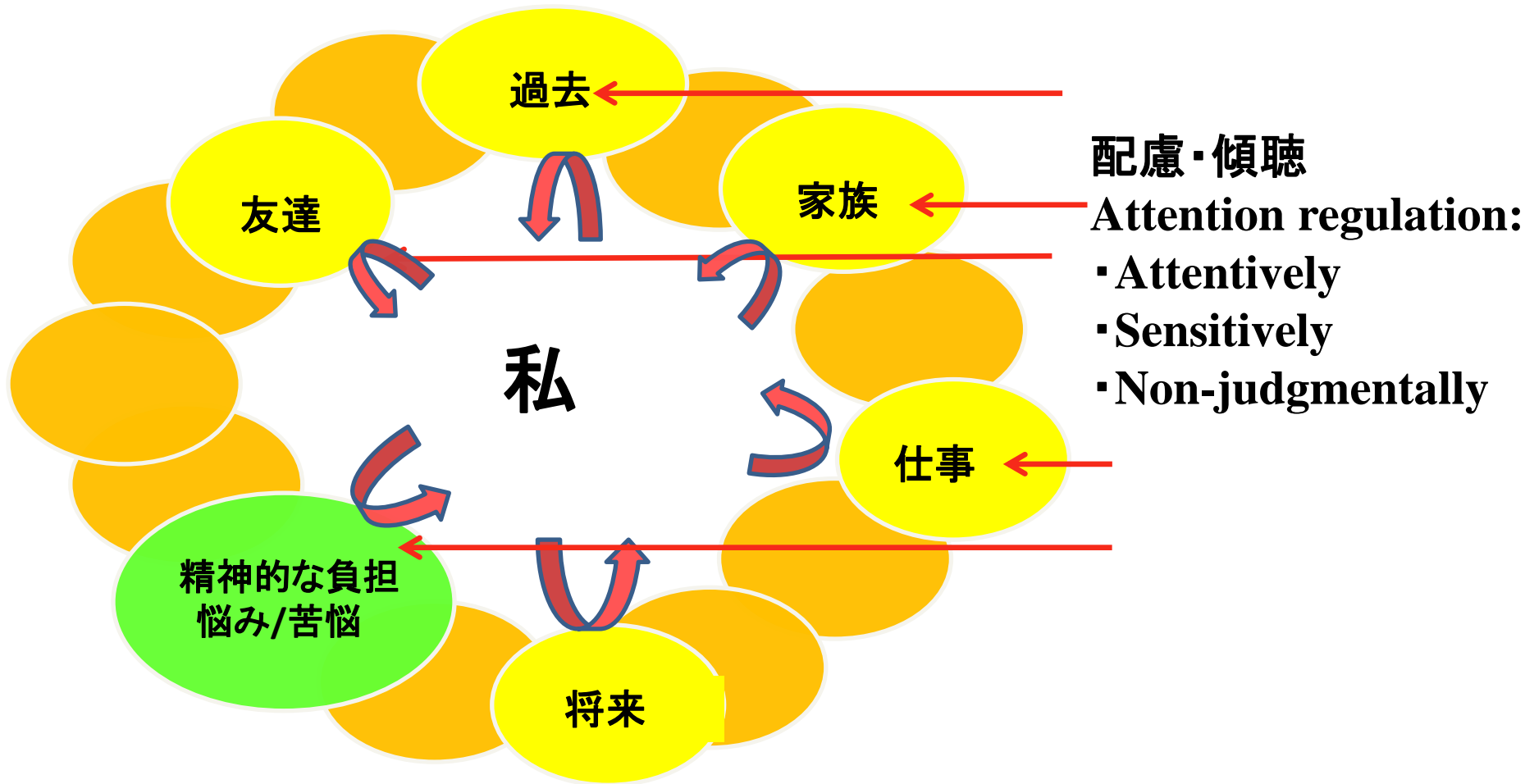
配慮・傾聴

Attention regulation:

- Attentively
- Sensitively
- Non-judgmentally

“意味付け”が
変わる！

“healing”の視点で考える「私の意味の回復」



医療者の“Healer”としての役割

「私」も人として、“いま・ここ”にいること

“いま”を大切にする「私」の在り方は、

“いま・ここ”にいる「あなた」の在り方を支える

“いま”を大切にする「あなた」の在り方は、

“いま・ここ”にいる「私」の在り方を支える

人は何のために生きるのか？

“人”

医療者の専門性とは？

どんな分野でも

臨床や教育に関わる以上

その専門性は

人と人との関係性のなかにある

“癒し人”

Whole Person Careのために明日からできること

“いま・ここ”を大切にすること

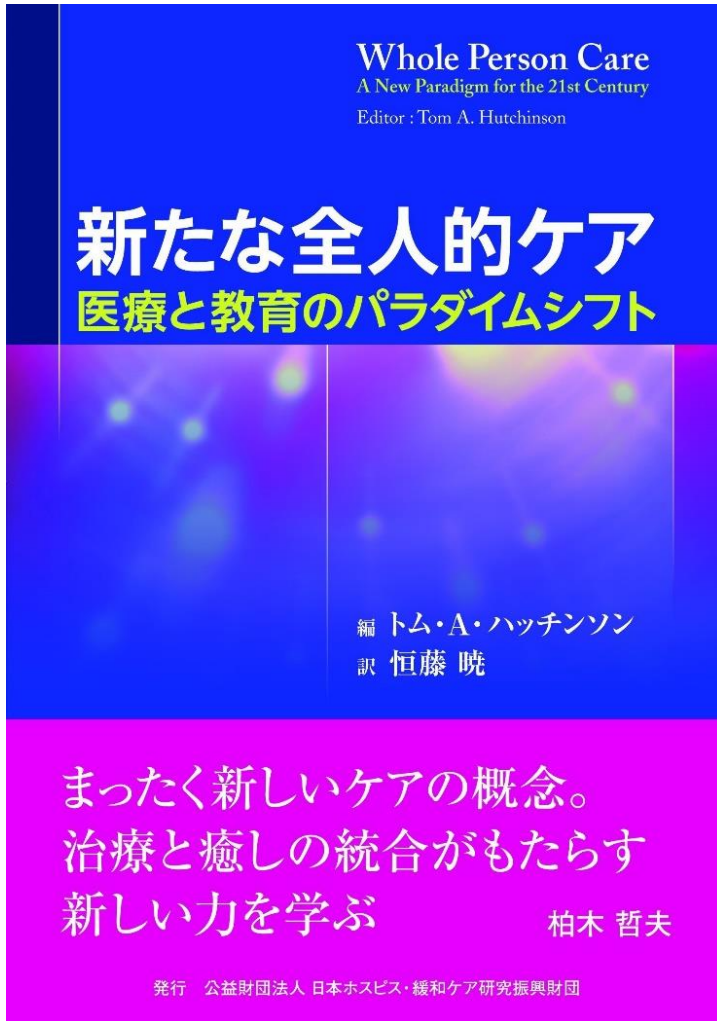
“いま”を大切にする「私」の在り方は、

“いま・ここ”にいる「あなた」の在り方を支える

“いま”を大切にする「あなた」の在り方は、

“いま・ここ”にいる「私」の在り方を支える

Whole Person Care テキスト



・“Whole Person Care”
の日本語訳版

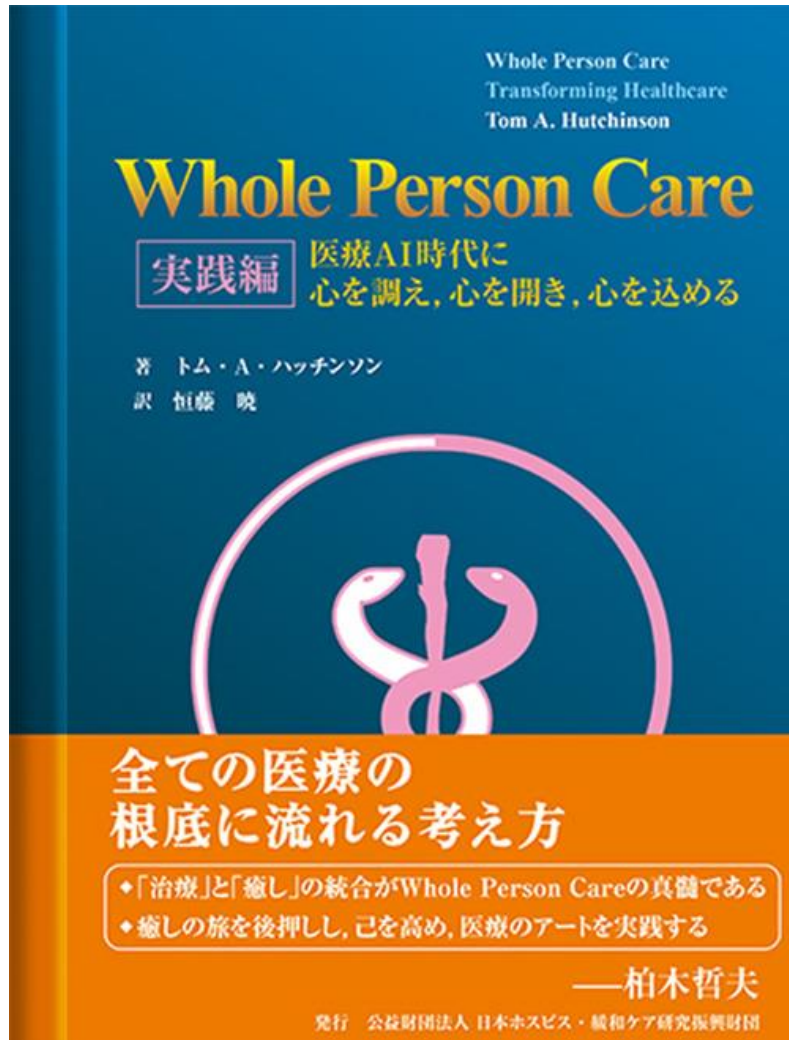
・『新たな全人的ケア』

副題:

医療と教育のパラダイムシフト

トム・ハッチンソン編、恒藤暁訳
発刊:ホスピス財団

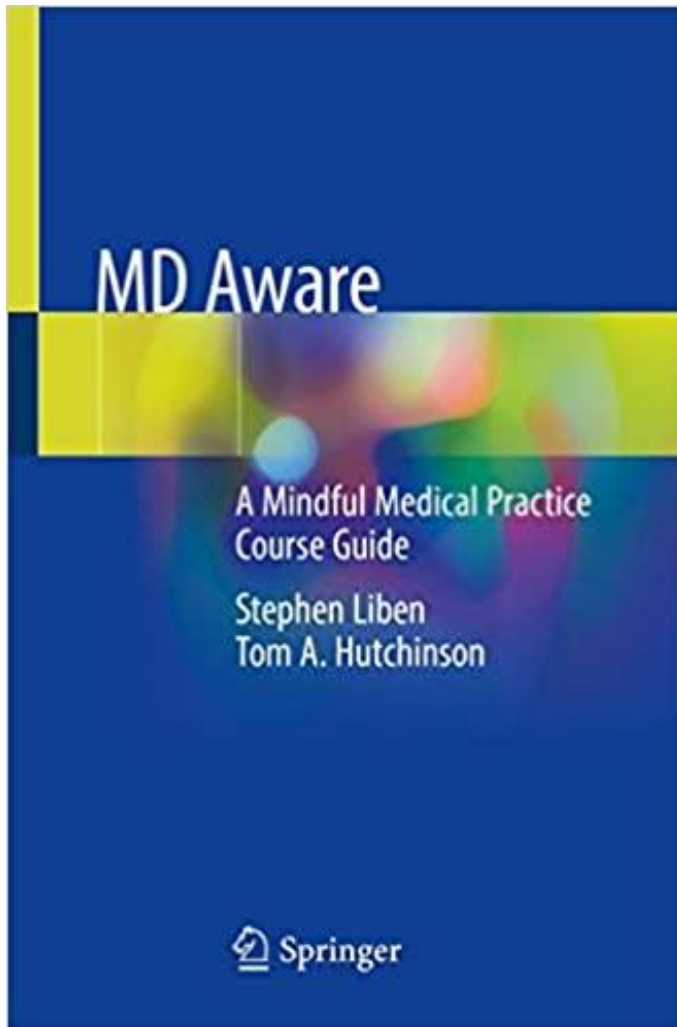
Whole Person Care 書籍第2弾



- ・『Whole Person Care 実践編』
医療AI時代に
心を調え、心を開き、心を込める

トム・ハッチンソン著、恒藤暁訳
発刊：ホスピス財団

Whole Person Care 書籍第3弾！



- 『MD Aware』
A Mindful Medical Practice
Course Guide

Stephen Liben

Tom Hutchinson 著

土屋静馬

三好智子

恒藤暁 訳



書籍紹介



- ・いのちと向き合うあなたへ『セルフケアできていますか？』マインドフルネスを活かして

高宮有介
土屋静馬 著
南山堂

国際Whole Person Care学会



Invited Speakers



カナダ、モントリオール

第4回大会

2021年10月の予定・・・

第1回大会Video:

<https://www.mcgill.ca/wholepersoncare/events-0/first-international-congress-whole-person-care>

Whole Person Care Program HP:

<https://www.mcgill.ca/wholepersoncare/>

参考文献

- Garry Beitel Whole Person Care The Need for a Paradigm Shift in Health, Balfore Mount, 2012, (DVD)
- Garry Beitel Whole Person Care The Man Who Learned to Fall, Phil Simmons & Balfore Mount, 2004, (DVD)
- Hutchinson AT (2011) Whole Person Care : a new paradigm for 21st century. Springer, New York (恒藤暁(訳). 新たな全人的ケア: 医療と教育のパラダイムシフト. 公益財団法人 日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団)
- Hutchinson AT (2017) Whole Person Care: Transforming Healthcare. Springer, New York (恒藤暁(訳). Whole Person Care 実践編 医療AI時代に心を調え、心を開き、心を込める. 公益財団法人 日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団)
- Liben S, Hutchinson AT (2019) MD aware. Springer, New York
- Markus, H.R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224–253.
- マイケル・ゲルベン. ハイデガー「存在と時間」註解, 長谷川西涯(訳), ちくま学芸文庫、2000
- Mount, BM., (1993) Whole person care: Beyond psychosocial and physical needs. *American Journal of Hospice and Palliative Medicine*, Vol 10, 1, 28 - 37
- Mount, BM., Boston PH., Cohen SR., (2007) Healing connections: on moving from suffering to a sense of well-being. *Journal of Pain and Symptom Management*. 33, 372-88
- Tsuchiya S, Takamiya Y, Snell S, Saroyan A. “ A Schematic Representation and A Possible New Description of Healthcare Professional’s “Resilience” from the Eastern Philosophical Perspective”, International Congress on Palliative Care, 2016-10-19
- 国立がんセンター“がんの療養と緩和ケア” http://ganjoho.jp/public/support/relaxation/palliative_care.html (参照 2020-07-02)
- セントクリストファーズホスピス ホームページ“History and Dame Cicely Saunders” <https://www.stchristophers.org.uk/about/history> (参照 2020-07-02)
- マギル大学 ホームページ “Physicianship Osler Fellowship Resources” <https://www.mcgill.ca/physicianship/osler-fellowship-resources> (参照 2017-04-15)
- マギル大学ホームページ“ Programs in Whole Person Care” <https://www.mcgill.ca/wholepersoncare/> (参照 2020-07-02)